

## 報 告

## 子育て支援としての相談活動のあり方

—保育所・幼稚園の保育者を対象にした質問紙調査から—

中 津 郁 子

## 〔論文要旨〕

保育所・幼稚園の保育者に対して子育て支援の必要性や保育の中で行われている相談活動について質問紙調査を実施した。その結果、子育て支援の必要性に関しては、ほとんどの保育者が高く認めていたが、負担感や、不安、戸惑いも見られた。

保育の中で行われる相談活動に関して、保護者と「ちょっとした会話」は半数以上が行っていた。また、約半数の保育者が相談能力の大切さを感じて努力していた。具体的な親子の姿を想定して、保育者の感情と対応について尋ねた質問では、40歳以上の保育者は、より臨床的な対応ができるようであった。継続的な研修が望まれるが、専門の相談員の配置も望まれる。

Key words : 子育て支援, 保育者, 保育行動, 相談活動, 保育臨床

## I. はじめに

子育て支援の背景として考えられることは、少子化の問題とともに、母親の育児不安や、地域社会の人間関係の希薄化など子育てをめぐるさまざまな問題である。そのような背景から、エンゼルプラン、新エンゼルプランが策定され、都道府県でもそれに基づいて実施計画が打ち出された。そして保育所や幼稚園においても子育て支援活動が取り組まれるようになった。

1997年の児童福祉法改正では、子育て支援はすべての保育所で取り組むものとなった<sup>1)</sup>。保育所における母親支援は、働く母親の仕事と子育ての両立支援のための体制づくりが中心となっている。しかし、保育時間の延長が子どもの成長や親子関係に影響する危惧も指摘されている<sup>2)</sup>。

また、幼稚園における子育て支援は、育児不安を抱え、家庭にいる母親たちを視野に入れて、地域の幼児教育のセンター的な役割を果たすことが求められている<sup>3)</sup>。

小出<sup>4)</sup>はカナダの子育て家庭の支援を紹介して、子育て支援は「一時的にせよどの家庭にも必要なもの」としてとらえ、「アドボカシー（権利の擁護、代弁）」という考え方があるとした。飯田<sup>5)</sup>は、エンゼルプランの限界を論じ、「視点を一人ひとりの親と子の立場に下ろして凝視していく必要がある」と述べた。

子育て支援は親の置かれている状況を、幅広い観点から把握することから始まる。何を支援するかは、個々によって異なるが、親自身の力をエンパワーすることである。

子育て支援の予防的な意味を考えると、地域に密着した保育所や幼稚園で行われることが望

An Ideal Consultation Activity for Child Care Support

[1763]

—From Questionnaires for childcare Takers of Day Nurseries and Kindergartens—

受付 05.11. 2

Ikuko NAKATSU

採用 06.10.11

国立大学法人 鳴門教育大学教育臨床講座（研究職）

別刷請求先：中津郁子 国立大学法人 鳴門教育大学教育臨床講座

〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島748

Tel : 088-687-6294 Fax : 088-687-6294

ましい。しかし、子育て支援に関する研究では、支援される側（親や子どもなど）を対象としたものが多く、支援活動を担っている保育者を対象としたものは少ない。

そこで、本研究では、保育者は子育て支援の必要性をどうとらえているか、また、保育の中での相談活動の実態と課題などを臨床的な立場から検討し考察することを目的とした。

## II. 対象および方法

### 1. 調査対象と実施時期

A県内の協力の得られた公立保育所・公立幼稚園の保育者279人に対して、2002年2月から3月に、質問紙調査を行った。質問紙は、各保育所・幼稚園を直接訪問して配布し、回収した（一部郵送）。246人（保育士139人、幼稚園教諭107人）から回答があり、回収率は88.2%であった。

### 2. 調査項目

保育所・幼稚園での子育て支援の活動内容や必要性に関すること、保育の中で行われている相談活動に関すること、実際に保育の中での対応の仕方など14項目である。子育て支援の必要性に関することは4件法で質問した。また、実際の保育の中における対応に関しては（質問紙抜粋参照）、保育の中でよく見られる親子（A子とその母親）と、子育て支援活動が始まってから保育者が戸惑うことのある親子（B子とその母親）を想定し、保育者の感情と対応に分けて質問した。選択式にし記述を少なくしたが、保育者が子育て支援に関して、さまざまな思いを抱えていると想像されるため、自由記述欄を広く設けた。

クロス分析は、「とてもそう思う」と「大体そう思う」をまとめて「思う」、「あまり思わない」と「まったく思わない」をまとめて「思わない」とし、 $\chi^2$ 検定で分析した。

13. あなたのクラスに次のような親子がいたとしたら、どのように接していきますか。

どれが正解というのではありませんので、普段されていることでお答えください。

ご自分の気持ちや接し方により近いもの一つずつに○をつけてください。

「保育中に勝手な行動が多く、友達に乱暴したりすることも多いA子だが、なんとなく母親もイライラしているように見える」・・・このようなA子の母親に対して（1）あなたはどのように思われますか。また、（2）あなたは普段、主としてどのように接しますか。一つずつに○をつけてください。

（1）どのように思われますか？

- ① なんとも思わない
- ② 特に気にしない
- ③ 何かあるのかなと思う
- ④ イライラする
- ⑤ 腹が立つ
- ⑥ 仕方ないと思う
- ⑦ 悲しくなる
- ⑧ その他（                      ）

（2）主としてどのように接しますか？

- ① 他の母親と同じように普通に接する
- ② A子のありのままの様子を伝えて会話する
- ③ A子の良い面を伝えて会話する
- ④ 雑談を交えつつ家庭の様子を聞く
- ⑤ 時間をとってじっくり話を聴く
- ⑥ 子育てに関して母親を指導する
- ⑦ 母親とはかかわらないようにする
- ⑧ 気にはかかるが様子を見る
- ⑨ その他（                      ）

「B子を預けて、母親は気楽そうにテニスに行っている。迎えに来ることが遅いこともある」・・・このようなB子の母親に対して（1）あなたはどのように思われますか。また、（2）あなたは普段、主としてどのように接しますか。一つずつに○をつけてください。

（1）どのように思われますか？

- ① なんとも思わない
- ② 特に気にしない
- ③ 何かあるのかなと思う
- ④ イライラする
- ⑤ 腹が立つ
- ⑥ 仕方ないと思う
- ⑦ 悲しくなる
- ⑧ その他（                      ）

（2）主としてどのように接しますか？

- ① 他の母親と同じように普通に接する
- ② B子様子を伝えて会話する
- ③ B子の良い面を伝えて会話する
- ④ 雑談を交えつつ家庭の様子を聞く
- ⑤ 時間をとってじっくり話を聴く
- ⑥ 子育てに関して母親を指導する
- ⑦ 母親とはかかわらないようにする
- ⑧ 気にはかかるが様子を見る

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 回答者の背景

回答者の年齢では表1のように、40歳代が最も多く、次いで20歳代だった。経験年数では、0～9年が最も多く、次いで20～29年となっていた。

表1 回答者の年齢・経験年数

|         |        | 保育所(%)   | 幼稚園(%)   | 合計(%)      |
|---------|--------|----------|----------|------------|
| 年 齢     | 20～29歳 | 49(35.3) | 24(22.4) | 73(29.7)   |
|         | 30～39歳 | 23(16.5) | 13(12.1) | 36(14.6)   |
|         | 40～49歳 | 39(28.1) | 42(39.3) | 81(32.9)   |
|         | 50歳～   | 27(19.4) | 27(25.2) | 54(22.0)   |
|         | 無回答    | 1(0.7)   | 1(0.9)   | 2(0.8)     |
| 経 験 年 数 | 0～9年   | 60(43.2) | 30(28.0) | 90(36.6)   |
|         | 10～19年 | 20(14.4) | 16(15.0) | 36(14.6)   |
|         | 20～29年 | 41(29.5) | 39(36.4) | 80(32.5)   |
|         | 30年～   | 18(12.9) | 21(19.6) | 39(15.9)   |
|         | 無回答    |          | 1(0.9)   | 1(0.4)     |
|         |        | n=139    | n=107    | 246(100.0) |

#### 2. 子育て支援の取り組み

調査したすべての保育所・幼稚園ではなんらかの形で子育て支援活動が行われていた。取り組み数では3つの活動を行っているという回答が最も多く、72人(29.3%)で見られた。取り組み内容では、保育士の回答で多かったのは「障害児保育」90人、「延長保育」48人、「一時保育」11人であり、幼稚園教諭の回答に多かったのは、「園庭や施設の開放」77人、「地域の乳幼児や保護者の登園日設置」33人、「預かり保育」33人、「母親たちのサークル活動」32人、「子育て相談」32人の順であった。子育て支援活動のための教育課程・指導計画の見直しについては、「変更または見直しをした」と答えたのは38人(15.4%)であった。

#### 3. 子育て支援の必要性

必要性の項目11項目では、表2のように、回答者が最も多く認めていたのは、「育児で悩んでいる親たちにとって必要」であった。「とてもそう思う」、「大体そう思う」を合わせると93.5%となっていた。次いで、「子育ての楽しさを伝えていくために必要」91.9%、「親と子のかかわり方を伝えていくために必要」

表2 子育て支援の必要性

|                  | とても<br>そう思う | 大体<br>そう思う | あまりそう<br>思わない | まったくそ<br>う思わない | 無回答     | 合計         |
|------------------|-------------|------------|---------------|----------------|---------|------------|
| ③育児で悩む親たちのため     | 156(63.4)   | 74(30.1)   | 10(4.1)       | 4(1.6)         | 2(0.8)  | 246(100.0) |
| ⑤子育ての楽しさを伝えるため   | 104(42.3)   | 122(49.6)  | 17(6.9)       | 1(0.4)         | 2(0.8)  | 246(100.0) |
| ④親と子のかかわり方を伝えるため | 115(46.8)   | 104(42.3)  | 21(8.5)       | 1(0.4)         | 5(2.0)  | 246(100.0) |
| ②働く母親のため         | 90(36.6)    | 122(49.6)  | 27(11.0)      | 4(1.6)         | 3(1.2)  | 246(100.0) |
| ⑥地域の教育力が落ちているから  | 66(26.8)    | 125(50.8)  | 43(17.5)      | 5(2.0)         | 7(2.9)  | 246(100.0) |
| ⑩通常の保育の中でできることを  | 57(23.2)    | 128(52.0)  | 47(19.1)      | 6(2.4)         | 8(3.3)  | 246(100.0) |
| ①少子化を防ぐため        | 51(20.7)    | 124(50.4)  | 58(23.6)      | 6(2.4)         | 7(2.9)  | 246(100.0) |
| ⑦必要性は感じるが多少負担    | 20(8.1)     | 134(54.4)  | 76(30.9)      | 9(3.7)         | 7(2.9)  | 246(100.0) |
| ⑧育児力低下を危惧        | 39(15.8)    | 75(30.5)   | 107(43.5)     | 17(6.9)        | 8(3.3)  | 246(100.0) |
| ⑪何をすればいいかわからない   | 16(6.5)     | 91(37.0)   | 104(42.3)     | 21(8.5)        | 14(5.7) | 246(100.0) |
| ⑨通常の保育に支障        | 24(9.8)     | 76(30.9)   | 119(48.3)     | 14(5.7)        | 13(5.3) | 246(100.0) |

89.1%の順であった。また、必要性を肯定的にとらえる6項目のいずれも、「とてもそう思う」、「大体そう思う」を合わせると70%以上であり、必要性を高く認めていた。必要性をどちらかというとな否定的にとらえる5項目では、「通常の保育の中でできることをすればいい」と回答した人が75.2%であり、「多少負担に感じることも

ある」が62.5%であった。

保育士と幼稚園教諭とのクロス分析では、表3のように保育士の方に必要感を高く認める項目が多く、また「何をすればいいかわからない」と思うのも保育士に多かった。

年齢別のクロスでは、「親たちを甘やかし、育児力を低下させることになりはしないかと

表3 保育士・幼稚園教諭の違いによる子育て支援の必要性

|                 |      |        | 保育所        | 幼稚園        | 合計         | カイ2乗値  | 有意水準 |
|-----------------|------|--------|------------|------------|------------|--------|------|
| ①少子化を防ぐため       | 思う   | 人数 (%) | 113( 83.7) | 62( 59.6)  | 175( 73.2) | 17.384 | ***  |
|                 | 思わない | 人数 (%) | 22( 16.3)  | 42( 40.4)  | 64( 26.8)  |        |      |
|                 | 合計   | 人数 (%) | 135(100.0) | 104(100.0) | 239(100.0) |        |      |
| ②働く母親のため        | 思う   | 人数 (%) | 124( 91.2) | 88( 82.2)  | 212( 87.2) | 4.294  | †    |
|                 | 思わない | 人数 (%) | 12( 8.8)   | 19( 17.8)  | 31( 12.8)  |        |      |
|                 | 合計   | 人数 (%) | 136(100.0) | 107(100.0) | 243(100.0) |        |      |
| ③育児で悩む親のため      | 思う   | 人数 (%) | 136(98.6)  | 94( 88.7)  | 230( 94.3) | 10.801 | **   |
|                 | 思わない | 人数 (%) | 2( 1.4)    | 12( 11.3)  | 14( 5.7)   |        |      |
|                 | 合計   | 人数 (%) | 138(100.0) | 106(100.0) | 244(100.0) |        |      |
| ④親と子のかかわり伝達のため  | 思う   | 人数 (%) | 128( 95.5) | 91( 85.0)  | 219( 90.9) | 7.87   | **   |
|                 | 思わない | 人数 (%) | 6( 4.5)    | 16( 15.0)  | 22( 9.1)   |        |      |
|                 | 合計   | 人数 (%) | 134(100.0) | 107(100.0) | 241(100.0) |        |      |
| ⑤子育ての楽しさ伝達      | 思う   | 人数 (%) | 133( 97.1) | 93( 86.9)  | 226( 92.6) | 9.084  | **   |
|                 | 思わない | 人数 (%) | 4( 2.9)    | 14( 13.1)  | 18( 7.4)   |        |      |
|                 | 合計   | 人数 (%) | 137(100.0) | 107(100.0) | 244(100.0) |        |      |
| ⑥地域の教育力が落ちているから | 思う   | 人数 (%) | 115( 85.2) | 76( 73.1)  | 191( 79.9) | 5.366  | *    |
|                 | 思わない | 人数 (%) | 20( 14.8)  | 28( 26.9)  | 48( 20.1)  |        |      |
|                 | 合計   | 人数 (%) | 135(100.0) | 104(100.0) | 239(100.0) |        |      |
| ⑦多少負担           | 思う   | 人数 (%) | 83( 62.9)  | 71( 66.4)  | 154( 64.4) | 0.312  | n.s. |
|                 | 思わない | 人数 (%) | 49( 37.1)  | 36( 33.6)  | 85( 35.6)  |        |      |
|                 | 合計   | 人数 (%) | 132(100.0) | 107(100.0) | 239(100.0) |        |      |
| ⑧育児力低下を危惧       | 思う   | 人数 (%) | 59( 44.7)  | 55( 51.9)  | 114( 47.9) | 1.218  | n.s. |
|                 | 思わない | 人数 (%) | 73( 55.3)  | 51( 48.1)  | 124( 52.1) |        |      |
|                 | 合計   | 人数 (%) | 132(100.0) | 106(100.0) | 238(100.0) |        |      |
| ⑨通常の保育に支障       | 思う   | 人数 (%) | 60( 46.5)  | 40( 38.5)  | 100( 42.9) | 1.523  | n.s. |
|                 | 思わない | 人数 (%) | 69( 53.5)  | 64( 61.5)  | 133( 57.1) |        |      |
|                 | 合計   | 人数 (%) | 129(100.0) | 104(100.0) | 233(100.0) |        |      |
| ⑩通常の保育の中で       | 思う   | 人数 (%) | 110( 83.3) | 75( 70.8)  | 185( 77.7) | 5.374  | *    |
|                 | 思わない | 人数 (%) | 22( 16.7)  | 31( 29.2)  | 53( 22.3)  |        |      |
|                 | 合計   | 人数 (%) | 132(100.0) | 106(100.0) | 238(100.0) |        |      |
| ⑪何をすればいいかわからない  | 思う   | 人数 (%) | 75( 58.1)  | 32( 31.1)  | 107( 46.1) | 16.891 | ***  |
|                 | 思わない | 人数 (%) | 54( 41.9)  | 71( 68.9)  | 125( 53.9) |        |      |
|                 | 合計   | 人数 (%) | 129(100.0) | 103(100.0) | 232(100.0) |        |      |

\*\*\* :  $p < .001$

\*\* :  $p < .01$

\* :  $p < .05$

† :  $p < .10$

n.s. : not significant

いずれも  $df = 1$

危惧」に「思わない」とする人が、20歳代に65.3%と多い傾向が見られた ( $\chi^2=7.498$ ,  $df=3$ ,  $p<.10$ )。また、「通常の保育に支障を来すのではないか」と思う人が40歳代に55.3%と有意に多く ( $\chi^2=8.305$ ,  $df=3$ ,  $p<.05$ )、「何をすればいいかわからない」と思うのは20歳代に66.7%と有意に多かった ( $\chi^2=19.866$ ,  $df=3$ ,  $p<.001$ )。経験年数でもほぼ同様であった。

#### 4. 相談員の必要や資質としての相談能力

専門の相談員が必要かどうかを聞いたものでは、表4のように、「大体必要」と「とても必要」を合わせると74.8%が「必要」としていた。保育者に期待されている相談能力は、表5のように「資質として大切と思うので、身につける努力をしている」と「研修や勉強の時間がない」とする人が45%前後で、ほぼ同じであった。「身につける努力をしている」との回答は、50歳代の人に多い傾向が見られた ( $\chi^2=7.359$ ,  $df=3$ ,  $p<.10$ )。

表4 相談員の必要性

| 項 目      | 人数  | %     |
|----------|-----|-------|
| とても必要    | 72  | 29.3  |
| 大体必要     | 112 | 45.5  |
| あまり必要ない  | 54  | 22.0  |
| まったく必要ない | 3   | 1.2   |
| 無回答      | 5   | 2.0   |
| 合 計      | 246 | 100.0 |

表5 相談能力について

| 項 目                   | 人数  | %     |
|-----------------------|-----|-------|
| ①十分身につけていると思う         | 4   | 1.6   |
| ②身につける努力をしている         | 108 | 43.9  |
| ③資質として大切だが研修や勉強の時間がない | 113 | 45.9  |
| ④身につけるのは難しい           | 12  | 4.9   |
| ⑤専門家がいたらいい            | 4   | 1.6   |
| ⑥必要な資質と思わない           | 1   | 0.4   |
| 無回答                   | 4   | 1.6   |
| 合 計                   | 246 | 100.0 |

#### 5. 保育行動としての相談活動

毎日の保育の営みの中で、保護者と行っている会話や伝達、保護者への接し方について質問した。「ちょっとした会話」の有無では、表6のように「ほとんど毎日している」が58.1%であった。連絡帳や手紙・電話などでの連絡は、表7のように「必要な時はしている」が69.1%であった。「20分以上の会話」については、「必要な時はしている」が74.8%であった。

#### 6. 保護者への対応

A子・B子とその母親を想定して、感情と対応に分けて質問した。保育の中でよく見られる親子の姿として、「保育中に勝手な行動が多く、友達に乱暴したりすることも多いA子だが、なんとなく母親もイライラしているように見える」を想定した。このA子の母親に対しては、表8、表9のように94.3%の保育者が、「何かあるのかな」と思い、半数以上が「雑談を交えつつ家庭の様子を聞く」と回答していた。

B子は、支援活動が始まってから保育者が悩む母親像として、一見ストレス発散をしていると思われる母親を想定した。「B子を預けて、母親は気楽そうにテニスに行っている。迎えに来ることが遅いこともある」というその母親に

表6 ちょっとした会話

| 項 目        | 人数  | %     |
|------------|-----|-------|
| ほとんど毎日している | 143 | 58.1  |
| 定期的に行っている  | 10  | 4.1   |
| 必要な時はしている  | 84  | 34.1  |
| 伝える時間がない   | 4   | 1.6   |
| 無回答        | 5   | 2.0   |
| 合 計        | 246 | 100.0 |

表7 連絡や伝達

| 項 目        | 人数  | %     |
|------------|-----|-------|
| ほとんど毎日している | 56  | 22.8  |
| 定期的に行っている  | 11  | 4.5   |
| 必要な時はしている  | 170 | 69.1  |
| 伝える時間がない   | 5   | 2.0   |
| 無回答        | 4   | 1.6   |
| 合 計        | 246 | 100.0 |

関しては、保育者の思いが表10のように分かれた。「何かあるのかな」が22.0%,「悲しくなる」19.5%,「腹が立つ」16.7%,「仕方ないなと思う」15.9%であった。

対応に関しては、表11のように34.6%の人がB子の「ありのままの様子を伝えて会話する」と回答していた。

B子の母親に対して、「何かあるのかな」との回答は、年齢別では表12のように、「回答あり」が40歳代で33.3%, 50歳代32.7%と多く、「回答なし」が20歳代に91.7%と有意に多くなっていた。

表8 A子の母親への保育者の感情

| 項 目      | 人数  | %     |
|----------|-----|-------|
| なんとも思わない | 0   | 0     |
| 特に気にしない  | 0   | 0     |
| 何かあるのかな  | 232 | 94.3  |
| イライラする   | 1   | 0.4   |
| 腹が立つ     | 0   | 0     |
| 仕方ないな    | 2   | 0.8   |
| 悲しくなる    | 2   | 0.8   |
| その他      | 5   | 2.0   |
| 無回答      | 4   | 1.6   |
| 合 計      | 246 | 100.0 |

表10 B子の母親への保育者の感情

| 項 目      | 人数  | %     |
|----------|-----|-------|
| なんとも思わない | 0   | 0     |
| 特に気にしない  | 16  | 6.5   |
| 何かあるのかな  | 54  | 22.0  |
| イライラする   | 13  | 5.3   |
| 腹が立つ     | 41  | 16.7  |
| 仕方ないな    | 39  | 15.9  |
| 悲しくなる    | 48  | 19.5  |
| その他      | 26  | 10.6  |
| 無回答      | 9   | 3.7   |
| 合 計      | 246 | 100.0 |

表9 A子の母親への保育者の接し方

| 項 目            | 人数  | %     |
|----------------|-----|-------|
| 他の母親と同じに接する    | 4   | 1.6   |
| ありのままの様子を伝えて会話 | 25  | 10.2  |
| 良い面を伝えて会話      | 58  | 23.6  |
| 雑談を交えて様子を聞く    | 125 | 50.8  |
| じっくり話を聴く       | 10  | 4.1   |
| 母親を指導          | 0   | 0     |
| かかわらない         | 0   | 0     |
| 気にかかるが様子をみる    | 10  | 4.1   |
| その他            | 1   | 0.4   |
| 無回答            | 13  | 5.3   |
| 合 計            | 246 | 100.0 |

表11 B子の母親への保育者の接し方

| 項 目            | 人数  | %     |
|----------------|-----|-------|
| 他の母親と同じに接する    | 32  | 13.0  |
| ありのままの様子を伝えて会話 | 85  | 34.6  |
| 良い面を伝えて会話      | 17  | 6.9   |
| 雑談を交えて様子を聞く    | 48  | 19.5  |
| じっくり話を聴く       | 6   | 2.4   |
| 母親を指導          | 6   | 2.4   |
| かかわらない         | 0   | 0     |
| 気にかかるが様子をみる    | 36  | 14.6  |
| その他            | 6   | 2.4   |
| 無回答            | 10  | 4.1   |
| 合 計            | 246 | 100.0 |

表12 「年齢」とB子母親への感情「③何かあるのかなと思う」の回答（クロス集計）

|      |        | 20～29歳    | 30～39歳    | 40～49歳    | 50歳～      | 合計         |
|------|--------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|
| 回答あり | 人数 (%) | 6( 8.3)   | 5( 15.2)  | 26( 33.3) | 17( 32.7) | 54( 23.0)  |
|      | 調整済み残差 | -3.5      | -1.2      | 2.7       | 1.9       |            |
| 回答なし | 人数 (%) | 66( 91.7) | 28( 84.8) | 52( 66.7) | 35( 67.3) | 181( 77.0) |
|      | 調整済み残差 | 3.5       | 1.2       | -2.7      | -1.9      |            |
| 合計   | 人数 (%) | 72(100.0) | 33(100.0) | 78(100.0) | 52(100.0) | 235(100.0) |

$$\chi^2=17.365 \quad df=3 \quad p<.01$$

#### IV. 考 察

##### 1. 子育て支援活動の取り組みと必要性について

子育て支援活動に関しては、調査した保育所・幼稚園においては何らかの活動に取り組んでいた。しかし、支援活動のための教育課程等の見直しはできていなかった。子育て支援活動に関する十分な理解と職員間での話し合いが十分になされているかどうか疑問である。

子育て支援の必要性<sup>11</sup>の項目では、必要性を肯定的にとらえるものは、いずれも「思う」が70%以上であり、保育者なりにその必要性を認めていることがわかった。

どちらかというとな否定的な項目では、「通常の保育の中でできることをすればいい」が最も多く、次いで「多少負担に感じる」であった。「何をすればいいかわからない」という20歳代の保育者の不安も見られた。

また、幼稚園よりも早くに子育て支援に取り組んだ保育所の保育士の方が、必要性を認めることも、戸惑いも多いという結果であった。

汐見<sup>6)</sup>は、「育児支援」のシステムづくりの中で「全国の保育関係者から疑問の声があがっている」と述べている。その1つは、地域の親の育児を支援するといっても、そのための独自の人材も環境も用意されておらず、本務である保育の手が抜けてしまうというものである。自由記述の中でも、子育て支援のための人員増員や設備を求める意見が述べられていた。それがないままに行われているのでは、必要性は感じるが不安や負担も感じてしまうのであろう。しかし、自分達の園でできることを工夫する力も大事である。また、これは子育て支援にかかわる行政関係者と連携し、それぞれの立場で、何をどう支援していくか議論し、できることから実践していくことが望まれる。

##### 2. 相談活動と保護者への対応について

毎日の保育の営みの中で、約半数の保育者は保護者との「ちょっとした会話」を積み重ねていた。また、保育の中での相談活動についても、約半数の保育者が相談能力の大切さを感じて努力していた。また、「努力している」のは50歳代に多く見られた。管理職であることが多い年

齢でもあるが、筆者の経験からも、保育者自身のゆとりや、経験による知識の積み重ねから積極的に保護者との対応に努力していると推測できる。

保護者への対応では、保育の中でよく見られるA子とその母親に関しては、「何かあるのかな」とほとんどの保育者が推察し、家庭の様子を聞いてみようとする保育者が約半数であった。B子の母親は子育て支援が始まってから保育者が悩む母親像であり、やはりそのことが現れていたようだ。親の状況を「なにかあるのかな」と思い巡らせる人が少なくなる。「ありのままの様子を伝えて会話する」がA子の母親への対応と比べて増えている。それには、保育者として母親を指導しなければという意図も感じられる。

自由記述の中に、子育て支援は「親のためのものであるように思う。働く親にとっては都合がよいが、決して子どもたちのためのものでないと思う。子育てに手を抜く母親が多い現状を悲しく思っている」というような意見や保護者の現状を嘆いたり、不満を述べたりして子どもへの影響を心配している意見が22人見られていた。保育者としての思いは理解できるが、共感的に受容し、母親の陥っているストレスに気付くことはできないとも考えられる。保育者の発想の転換が求められる。

年齢別では、20歳代の保育者は親と近い存在であり、共感し易い。しかし、臨床的にみると、40歳以上の保育者に相談能力を身につけて、保護者の背景にあるものを探ろうとする姿勢もあり、より受容的な対応ができると考えられる。

土谷・千葉<sup>7)</sup>は、「保育者の役割は、預かる、教える、相談するだけでなく、子どもの内面を代弁したり、共感的なやり取りのモデルを示したり、また子どもの行動の言語化を図って両親に伝える等、親子の媒介者として親子関係の調整が可能になるような役割も求められている」と言う。しかし、一方で、中野・土谷<sup>8)</sup>は保育所の「従来の役割は子どもの保育であり、親子関係や保護者の問題を支援する体制は未熟である。それなりの施設と人材などの制度的な保障が不可欠である」と述べている。また、藤後<sup>9)</sup>や小林<sup>10)</sup>も専門家との連携を期待している。自

由記述の中にも, 専門の相談員を望む声が多く見られていた。発達心理学・臨床心理学・女性学などに幅広い知見をもった相談員の存在は重要であり, 保育者と保護者との関係調整の意味でも大切な役割を果たすことができると考える。

## V. おわりに

以上のことを含めて, 保育所や幼稚園の子育て支援や相談活動において, 以下のことを提言したい。

- (1) 子育て支援のあり方や必要性に関して, 園内での十分な話し合いや研修が望まれる。
- (2) 保護者とのちょっとした会話を大切に, そこから保護者の実情を把握する姿勢が今後も望まれる。
- (3) 重点的に40歳以上の保育者に相談技術習得のための研修を継続的に行い, 積極的に相談にあたることが望まれる。
- (4) 保護者の相談を受ける役割や保育者と保護者を繋ぐ役割, 保育者の子育て相談・支援の機能を高め, サポートする役割としての専門の相談員の配置が望まれる。

## 文 献

- 1) 厚生省児童家庭局. 保育所保育指針. 2000; 79.
- 2) 汐見稔幸. 親子ストレス—少子社会の「育ちと育て」を考える—. 平凡社新書 2000; 188-189.
- 3) 文部省. 幼稚園教育要領解説. 1999; 206.
- 4) 小出まみ. 地域から生まれる支えあいの子育て. ひとなる書房 1999; 137-140.
- 5) 飯田 進, 菅井正彦. 子育て支援は親支援—その理念と方法—. 星雲社. 2000; 15-42.
- 6) 汐見稔幸. 特集 21世紀の子育て支援ネットワーク. 発達. ミネルヴァ書房 2000; 84: 72-75.
- 7) 土谷みち子, 千葉政江. これからの育児支援を考える—親子関係の調整と子どもの成長を支える—. 日本保育学会第51回研究論文集 1998; 786-787.
- 8) 中野由美子, 土谷みち子. 21世紀の親子支援. ブレーン社 1999; 126.
- 9) 藤後悦子. 保育現場における心理相談員の役割—心理相談活動のプロスペクティブ・スタディー. 保育学研究 2001; 39: 2: 66-72.
- 10) 小林 真. 幼稚園における教育相談の必要性—子育て支援の新しい方向性を求めて—. 富山大学教育実践総合センター紀要 2001; 2: 39-44.